

## II 各教科の正答率、問題の内容及び所見・解説

### 1 国語

#### (1) 正答率

問題	配点	正答		一部正答		誤答		無答		通過率 率 = $\frac{\text{得点計}}{\text{人数} \times \text{配点}} (\%)$	
		数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)		
1	問 1	4	360	89.8	0	0.0	41	10.2	0	0.0	89.8
	問 2	4	371	92.5	0	0.0	30	7.5	0	0.0	92.5
	問 3	6	366	91.3	19	4.7	7	1.7	9	2.2	93.8
	問 4	7	196	48.9	99	24.7	49	12.2	57	14.2	63.6
	問 5	5	178	44.4	66	16.5	155	38.7	2	0.5	52.9
2	問 1 (1)	2	337	84.0	0	0.0	48	12.0	16	4.0	84.0
	問 1 (2)	2	332	82.8	0	0.0	56	14.0	13	3.2	82.8
	問 1 (3)	2	295	73.6	0	0.0	77	19.2	29	7.2	73.6
	問 1 (4)	2	211	52.6	0	0.0	104	25.9	86	21.4	52.6
	問 1 (5)	2	274	68.3	0	0.0	104	25.9	23	5.7	68.3
	問 2	3	219	54.6	0	0.0	179	44.6	3	0.7	54.6
	問 3	3	304	75.8	0	0.0	94	23.4	3	0.7	75.8
	問 4 (1)	3	366	91.3	0	0.0	34	8.5	1	0.2	91.3
	問 4 (2)	3	323	80.5	0	0.0	77	19.2	1	0.2	80.5
問 4 (3)	2	347	86.5	0	0.0	33	8.2	21	5.2	86.5	
3	問 1	4	324	80.8	0	0.0	75	18.7	2	0.5	80.8
	問 2	4	272	67.8	41	10.2	84	20.9	4	1.0	72.9
	問 3	6	83	20.7	151	37.7	105	26.2	62	15.5	39.8
	問 4	5	198	49.4	0	0.0	149	37.2	54	13.5	49.4
	問 5	7	83	20.7	184	45.9	38	9.5	96	23.9	48.1
4	問 1	3	297	74.1	8	2.0	74	18.5	22	5.5	75.1
	問 2	3	138	34.4	61	15.2	123	30.7	79	19.7	43.8
	問 3	3	302	75.3	0	0.0	92	22.9	7	1.7	75.3
	問 4	3	264	65.8	0	0.0	129	32.2	8	2.0	65.8
5	12	36	9.0	339	84.5	13	3.2	13	3.2	61.3	

(小数第2位を四捨五入しているため、%の合計が100にならない場合がある。)

#### (2) 問題の内容

- 1 出典は一色さゆり著『ピカソになれない私たち』である。問題文として使用した箇所は、大学生の望音が、久しぶりにキャンパスに訪れた同級生の太郎と対話する場面である。主に望音の視点で描かれており、将来への葛藤や同級生との人間模様など、受検生が共感しやすい題材である。心情表現が豊かなこの文章は、受検生の国語の力を多角的に判断する資料文として適切だと考えられる。
- 2 漢字の読み書き、基本的な文法の知識（動詞の活用の種類及び活用のある付属語について）、話し合いの場面における発言の内容や資料の作成と使用、文の組み立ての関係（係り受け）について解答する問題である。
- 3 出典は河野哲也著『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』である。問題文として使用した箇所は「第五章 対話する身体はどのように考えているか」の部分である。ここでは、人間が考える思考の過程と歩く過程が非常に似通っていることが述べられている。専門的な用語を多用せず平易な言葉を選んで記述されており、受検生が興味をもちやすく、多様な価値観に触れることで視野を広げ、考えを深めることができる文章であると考えられる。
- 4 出典は吉田兼好『徒然草』である。問題文として使用した第177段の内容は以下の通りである。  
「鎌倉中書王のお住まいでの蹴鞠の際に、雨が降った後で庭が乾かなかったので相談していたとこ

ろ、佐々木隠岐入道がおがくずを車に積んでたくさん差し上げたので、ぬかるみの心配がなくなって、人々はそのことを感心しあつた。ある者がこのことを語った際に、吉田中納言が『乾いた砂（乾き砂子）の用意はなかったのだろうか』とおっしゃったので、作者は恥ずかしく感じた。結構だと思つたおがくずも言われてみると下品で、庭の整備を取り仕切る者が、乾いた砂を準備するのは、昔からの習わしだという。」

平易な表現で記されており、話の展開も読み取りやすい文章だったと考えられる。

- 5 資料は、内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」における「ボランティア活動に興味がある理由」の項目をもとに作成された棒グラフである。日本の満13歳から満29歳までを対象にした調査資料をもとに、「ボランティア活動に期待すること」についての自分の考えが相手に効果的に伝わるよう、自己の体験をふまえ、展開を工夫して書く力をみようとしました。

### (3) 所見・解説

- 1 文学的な文章を理解する力をみようとしました問題である。

問1 登場人物の心情を読み取り、内容をとらえる力をみる問題である。この場面では、太郎が別の美大に通う昔の仲間とグラフィティを実践することを考えており、「今までやってきたことは無駄じゃない気がする。」と口にし、それに対して望音が「……そっか、うまくいくとええなあ。」と答え、ほほ笑んでいる。この読み取りに合致する選択肢はイである。

問2 場面や登場人物の設定をとらえ、内容を理解する力をみる問題である。この箇所では望音が「答えられなかった」質問とは、イギリスのロイヤカ（ロイヤル・アカデミー）での「あなたはここで、どんな絵を描きたいの？」である。このことに「ろくに答えられなかった」理由は、傍線部②以降に「その理由は、英語だったからだけではない。」「自己主張を求められる大都会で、本当に自分はやっていけるのか。」「覚悟がいまだに決まらないまま（中略）ここまで来てしまっていた。」と記されている。これらの表現などから因果関係を整理して、適切な選択肢を選ぶ。正答はウである。

問3 登場人物の描写に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。傍線部③「望音は目をぱちぱちさせながら太郎を見る。」という表現からは、望音にとって予想外のことがあったことを読み取ることができる。これをふまえて傍線部③より前のやりとりを見ると、「海外に行く必要なんてない気もして——。」と迷いを見せる望音に、太郎が「望音が海外に行って勉強したあと、どんな絵を描くのか、めっちゃくちゃ見てみたいよ。」と言い、それに対して望音が「見てみたい？」と聞き返している。これら一連の表現から、望音にとって予想外だったことは、自分が海外に行った後の絵を他人が見てみたいと思っていることであると言える。よって、I 海外に行く（5字）、II どんな絵を描くのか（9字）が正答となる。

問4 登場人物の言動の意味を的確にとらえ、条件（「卒業制作」「未知」の二つの言葉を使い、指示された字数内で解答する）に応じて適切に表現する力をみる問題である。太郎の言葉を受けた望音の心情が読み取れる言葉には、「そう言われて、はじめて望音は思い出す。」「**卒業制作**のプランは、それ以前の自分の自己模倣でしかなかった。」「もっと広くて**未知**の世界に足を踏み入れなくちゃ」などがある。その結果、望音が「絵を描きたいという気持ちが広がっていく」とあり、これらから太郎への感謝の気持ちにつながっていくことが読み取れる。こうした内容をふまえて、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

問5 表現上の工夫に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。正答はアとエである。アは「離島出身の太郎」とあるが、本文中に太郎が離島出身であることが読み取れる表現はない。また、選択肢にある方言を含んだ言葉も、太郎ではなく望音の発した言葉である。エについては「描くことは冒険であり旅」「大輪の花を咲かせる」はいずれも擬人法ではない。

- 2 基礎的・基本的な言語能力をみようとしました問題である。

問1 基本的な漢字の読み書きについての問題である。(2)の「迅速」は、様々な誤答がみられ、「しゅんそく」「びんそく」など「迅」の読み誤りが多かった。(4)の「縦断」は、「従断」もしくは「往断」と書いたもの、点画が足りないもの、「縦」の字だけが無答のものなど、誤

答が多岐に渡っており、語彙として定着していない傾向がみられた。漢字それ自体を機械的に覚えるのではなく熟語で理解することや、様々な文や文章に触れることで語彙を増やしていくなどの学習の工夫が必要である。

- 問2 基本的な文法（動詞の活用の種類）についての理解を問う問題で、正答はウである。エとする誤答が多くみられた。国語を正確に理解し、適切に表現するために、基本となる言葉の特徴やきまりを押さえることが大切である。
- 問3 基本的な文法（断定の助動詞「だ」および語尾が「だ」となる品詞の識別）についての理解を問う問題で、正答はイである。文章の中での語句の意味を考え、言語の法則を見いだすことは、言語生活の向上をめざすうえでも大切なことであり、文脈の中で適切に用いることを意識する必要がある。
- 問4 (1)は日常的な授業の一場面を想定しながら、何について話し合っているかをとらえ、その過程を客観的に把握する力をみる問題である。「話し合いの様子」の中から、登場人物たちがどのような判断をしたか記述されている部分を探すものであり、正答はイである。(2)は、スピーチやプレゼンテーションにおいて使用するフリップの、作成時や用いる際に気をつける内容について答える問題である。適さないものを選択する問いのため、正答は「強調」や「情報の整理」といった提示資料の特性を活かすことができていないエとなる。(3)は、文の組み立ての関係（係り受け）についての理解を問う問題である。主部（目標とするのは）と正しく対応し、かつ（はじめの文）を推敲したという条件から「したい（する）」という言葉の意味を損なわずに置き換えることのできる言葉は、「すること」となる。

3 説明的な文章を理解する力をみようとした問題である。

- 問1 文章に書かれている内容を正しく読み取り、理解する力をみる問題である。傍線部①以降の表現に着目し、最初の形式段落全体の内容を読み取る。着目すべきは「（カヌーでは）歩いているとき（中略）とは、思考の働き方がかなり異なる」「カヌーを漕いでいるときの方が、より深く、より多角的に、その場所に包まれる。」「（カヌーでは）自分は環境の一部となり、その一部分全体が移動する」「カヌーでの思考は、歩行のときよりも形而上学的になる。」といった表現である。これらから、特にカヌーと歩くことの違いについて、内容に即して説明したアが正答となる。多かった誤答はウであるが、7～8行目に「歩いているときには（中略）それから身を引き剥がし、足を宙に浮かしている。」とあり、カヌーがそのような身体活動であるとは述べられていない。
- 問2 文章の論理の展開の仕方をとらえ、内容を正確に理解する力をみる問題である。本文では、自然と一体化するカヌーに続いて、具体例として「ヨットと乗馬」について示している。そこでは「ヨットと乗馬は、圧倒的に素晴らしい経験であるが、歩くこととは似ていない。」とあり、乗馬に関しては同じ段落で、「（馬とは）志向性がかなり異なり、ときに初心者には難解な言葉を容赦なく浴びせてくる。」「馬の歩行のリズムは、人間の歩行のリズムと異なるが、非常に快適であり、快樂をもたらす。」と述べられている。またヨットについては、「散歩よりもはるかに危険な行為であり、個体の生命をつねに自覚させられる。」とある。さらに、同じ段落にはセイリングを例として、「セイリングでは、カヌーと同じく、自然に完全に包まれ、風と波、海の一部と化す。」「しかしカヌーが身体との一体感が強いのに比較すると、ボートは依然として乗り物であり、クルーもいる。」「セイリングでは、多忙な労働と瞑想が交互にやってくる。」などと述べられている。こうした記述に合致する選択肢イとオが正答となる。誤答で多かったのはアとエであるが、アは、「初心者は、ときに難解な言葉を容赦なく馬に浴びせてしまう」とあり、本文の記述に対して「初心者」と「馬」が逆になってしまっており適切ではない。エは「多忙な労働を絶え間なく続ける必要がある」が、本文の「多忙な労働と瞑想が交互にやってくる。」と合致せず、適切ではない。
- 問3 文章の構成や展開に注意して内容を理解し、適切に表現する力をみる問題である。設問文には(1)何を感じ取り、(2)どのようにすることか、とあることをふまえ、傍線部③以降の記述を見ていく。傍線部③の1～2行後に(2)につながる「外に出て（中略）歩くことは、大げさに言えば、自分を異なった存在にすることである。」とある。また、その次の文には(1)につながる「散歩もトレッキングも（中略）こうした身体と環境の即応を感じ取るものである。」と

ある。これらの記述から、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

- 問4 事実と意見等を読み分け、内容を的確にとらえる力をみる問題である。傍線部④に「さがしものが自分を変化させる」とあり、自分を変化させるような「さがしもの」についての記述として、同段落中の前後のまとまりから指示された22字に合うものを探すと、「出会ったときにはそれを必然と感じるような何か」がある。解答はその「最初の五字」であるので、「出会ったと」が正答となる。多かった誤答は「それは自分」と「自分にしか」であるが、いずれも22字では「それは自分にしか見つけられない場所を訪れること」「自分にしか見つけられない場所を訪れること」になってしまい、適切ではない。
- 問5 文章全体と部分との関係をとらえ、条件（「道路」「失敗」の二つの言葉を使い、指示された字数内で解答する）に応じて適切に表現する力をみる問題である。設問の「散歩の歩き方」が「どのような点で考えることに似ているか」ということと、条件として指示されている「道路」と「失敗」の言葉に注目する。「道路」については傍線部⑤の2行後に「知的な探求は、踏みならされた道路を進むことではありえない。」との記述がある。また、「失敗」については傍線部⑤の5～6行後に「細かな失敗と修正を繰り返して、私たちは歩むのだし、考えることも話すことも同じような過程で進んでいく。」とある。さらに傍線部⑤「こうした」が指す内容については、傍線部⑤の6行前「それは自分にしか見つけられない場所を訪れること」や、同じく傍線部⑤の前の行「私たちは再び歩き出す。どこでもない目的地を探して。」が挙げられる。これらの内容をふまえて、指示された字数と文脈に合うようにまとめる。

4 古典を理解する基本的な力をみようとした問題である。

- 問1 歴史的仮名遣いについての理解をみる問題である。正答は「わづらいなかりけり」である。主な誤答には、「わづらいなかりけり」や「わづらひなかりけり」などがあつた。文語のきまりを正確に理解するとともに、古文を音読し、古典特有のリズムを味わいながら古典の世界に親しむことが大切である。
- 問2 文章に書かれている内容を、叙述に基づいて的確にとらえる力をみる問題である。傍線部②「人感じあへりけり。」の対象は、傍線部②が「『とりためけん用意ありがたし』と、」を受けていることから、佐々木隠岐入道の「とりためけん用意」に対して「感じあへりけり。」（感心した）のだとわかる。ここでいう「用意」とは、さらに前の叙述から「鋸の屑（おがくず）」のことであることが読み取れる。このような記述を参考にしながら、「鋸の屑（おがくず）」を「用意（準備）」したということ、適切な表現を用いて解答する。
- 問3 場面や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解する力をみる問題である。まず文中に登場するのはイ「ある者」とウ「吉田中納言」である。イ「ある者」を主語とした際に述語にあたるのは「語り出でたりし」であり、「のたまひたり」の主語にはならない。ウ「吉田中納言」を主語とした際には、「吉田中納言の『（中略）』とのたまひたりしかば、」という文構造になるので、正答はウである。
- 問4 古典に表れたものの見方や考え方をとらえ、内容を理解する力をみる問題である。本文の全体の内容に着目する。特に、作者の考えにあたる末尾の記述「庭の儀を奉行する人、乾き砂子を設くるは、故実なりとぞ。」に着目すれば、正答のエを選ぶことができる。なお、ア「雨が降る前から庭に砂を敷いておく」、イ「庭を整備する道具を車で運ぶ」、ウ「砂が大量に必要」といった内容はいずれも本文中に記述がなく、適切ではない。

5 資料から読み取ったことをもとに、「ボランティア活動に期待すること」についての自分の考えを、構成を工夫しながら、自らの体験をふまえて書く力をみようとした問題である。資料は、内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」より作成したものである。誤答としては、資料から読み取ったことだけを書き、自らの体験や期待することについての考えを書いていないもの、条件を満たしていないものが多かった。また、指定された二段落構成となっていないもの、誤字・脱字や接続詞の誤用、言葉の使い方が間違っているものなどがみられた。資料から情報を正確に読み取り、目的に応じて相手に伝わる文章を書くことができるように普段から意識して学習する必要がある。